

菊の博学

- ・ キク科キク属に含まれる宿根草で、学名をクリサンセマム・モリフォリウム(Chrysanthemum morifolium)といいます。日照時間の長い時期に成長して、日照時間が短く(13 時間以下)なるとつぼみをつけ開花する短日性植物です。
- ・ 菊の開花時期は一般的に10月下旬から12月中旬です。旬は11月上旬といわれており、秋を代表する花です。

菊の歴史

- ・ 菊の原産地は中国で3,000年以上の歴史があり、日本へは奈良時代中期に遣唐使などによって薬用植物(解熱、頭痛、めまい、長寿など)として入ってきたと言われています。
- ・ 平安時代には、9月9日の重陽の宴で花を觀賞し、赤白黄の綿を花にかけて菊酒を飲み、その綿で身体をぬぐう「着せ綿の行事」が行われていました。(老いを防ぐ効果があると考えられていました。)
- ・ 一般庶民に菊栽培が広がったのは、江戸時代中期の1710年代(正徳～享保)に花径18cm以上の大菊の新花を競う「菊合わせ」が盛んになった頃からです。入賞すると新花の苗1本が3両にもなったため一獲千金と名誉をかけて一般愛好家が交配実生に熱中し、次々と優れた品種が誕生しました。また、この時代に地域独特の古典菊も誕生し、江戸の植木屋が菊で富士山や名所の風景、菊人形などを作りはじめ、現在の菊作りの型がほとんど揃ったと言われています。
- ・ 明治20年代には、各地に菊花会ができ、大菊三本仕立て(盆養)が流行し、その華を競い始めました。懸崖や盆栽は大正初めに流行し、以後広く作られるようになりました。
- ・ 日本で大きく発展した菊は、明治以降、世界各地に運ばれ、品種改良がなされました。オランダではスプレー菊、アメリカでは鉢花用のポットマムが発達しました。

菊の種類

- ・ 大菊(和菊)：花の直径が18cm以上で、花型によって「厚物」、「管物」、「広物」に分かれます。「厚物」は、更に「厚物」、「厚走り」、「大掴み」に分かれ、「管物」は、管の大きさで「大管」、「間管」、「細管」、「針管」に分かれます。また、「広物」は一重咲きの「一文字」と八重咲きの「美濃菊」があります。
- ・ 古典菊(和菊)：江戸中期に各地の殿様の保護奨励によって地域独特の発展を遂げた菊の総称で、昔の地名で呼ばれています。その種類には、嵯峨菊、伊勢菊(松坂菊)、肥後菊、江戸菊、美濃菊、奥州菊などがあります。
- ・ 小菊(和菊)：花の直径が9cm未満で山菊と呼ばれることもありますが、懸崖仕立てや盆栽用に育成された小輪の菊です。花色、花型、生育の特徴など極めて多彩で、種類が豊富です。
- ・ 洋菊類：洋菊とは、欧米に渡った日本の菊がそれぞれの国の好みによって改良されたものの総称であり、クッションマム、ポットマム、スプレー菊などがあります。

菊の仕立て方

- ・ 大菊：三本仕立て、一本仕立て、七本仕立て、千輪作り、競技用切花、ダルマ作り、福助作りなど
- ・ 古典菊：ほうき作り、七五三作り、天地人作り、篠作り、肥後菊花壇など
- ・ 小菊：懸崖作り、杉作り、造形、ポットマム、クッションマム、盆栽作り、直幹仕立て、双幹仕立て、岩付け・木付け盆栽、盆栽懸崖、柳仕立て、筏吹き・根つながり、寄せ植え、木付けなど
- ・ その他：弥彦作り、菊人形、総合花壇など

問合わせ先

岐阜市都市建設部公園整備課

〒500-8701 岐阜市今沢町18番地

TEL:(058)214-2184 FAX:(058)262-0512

岐阜公園管理事務所

〒500-8003 岐阜市大宮町1丁目46番地

TEL:(058)262-3951 FAX:(058)262-3951

第48回 岐阜公園菊人形・菊花展

開催期間:令和元年10月25日(金)~11月20日(水)

AM9:00~PM5:00(※開催中無休、無料)

第48回菊人形テーマ『戦国武将ゆかりの地 岐阜』

菊作りの名人たちが育てた大菊、小菊、美濃菊の作品をはじめ、菊人形や華やかな菊庭園などが展示されます。また、菊人形の前庭には、色とりどりの小石を敷きつめ、鳥の形に刈り込んだ樹木を配するなど、16世紀末に来日したスペイン人「アビラ・ヒロン」が書いた「日本王国記」の記述に基づき復元された庭が楽しめます。



会場：岐阜公園(岐阜市大宮町1丁目)

駐車場：普通車：堤外駐車場179台(一回310円)：鏡岩緑地279台(無料)

バス：9台(一回1,040円)・・・要事前予約

予約先 (一財)岐阜市みどりのまち推進財団 TEL(058-262-4787)

アクセス：JR岐阜駅または名鉄岐阜駅からバス15分

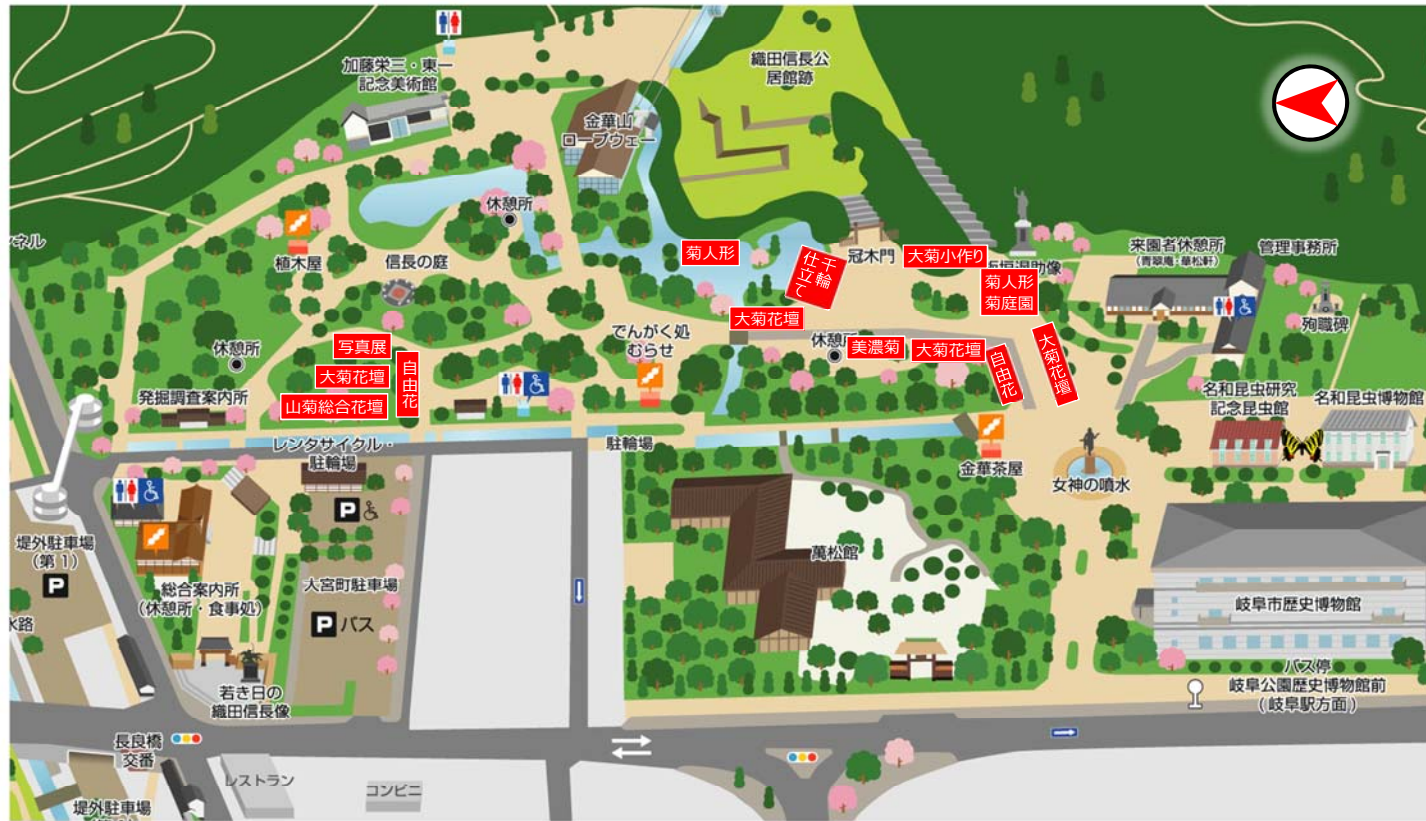
「岐阜公園歴史博物館前」下車徒歩2分

※周辺駐車場は混雑が予想されますので、公共交通機関をご利用ください。

主催：岐阜市

共催：岐阜公園愛菊会、岐阜市緑化推進研究会

菊人形・菊花展案内図



山菊総合花壇

木付け、石付け及び文人等、5鉢以上の作品を組み合わせ、一つの花壇として構成したものです。これは、この地方特有の作風で、他ではほとんど見られず本菊花展の特色を表すものです。

大菊花壇

大輪菊の3本立ち12鉢もしくは、一本立ち20鉢をもって一つの花壇を構成したものです。

美濃菊

皇室の紋章の図案といわれる一文字菊を祖先にもつこの菊は、名前から推測されどおり岐阜が発祥の地です。

この花の特徴は花卉の表裏の色が異なるものがあり、一種の多重味と鮮やかさを持っています。

千輪仕立て

1株でできるだけ多くの花を咲かせるよう仕立てます。100輪以上咲かせたものを千輪仕立てと規定しているところもあります。

山菊総合花壇



大菊花壇



千輪仕立て



大菊小作り

7月頃に菊の芽差しを行い、比較的短期間に育成し花を楽しむもので、一鉢一本立として10鉢をもって一花壇を構成します。

小菊盆栽

この部門は、小菊自体の特性を生かし、作品中に幹や根を強調し、盆栽風に仕立てられたもので、数年栽培されている古木も含まれます。

小菊盆養

この部門は、全国的にも珍しいこの地方特有の作風で、古木を主体にして小菊を育成したもので、あたたかも樹齢数十年を経て現在に咲き誇っているかのようです。

自由花

この部門は、作者が自由な発想に基づいて育成した菊花作品を展示したもので、出展にあたっては大菊、新花、古花等、規定はありません。

大菊小作り



小菊盆栽



小菊盆養



令和元年度菊人形テーマ「戦国武将ゆかりの地 岐阜」

岐阜でゆかりのある戦国武将といえば数多くいるが、最も多く名前が挙がる人物は織田信長公であろう。永禄10年(1567)、妻濃姫の甥、斎藤龍興を追放し岐阜に入城した信長公は「井の口」と呼ばれていた地名を「岐阜」と改めるとともに天下布武を掲げ、天下取りに着手した。また、信長公は岐阜の地で様々な政策を打ち出した。楽市楽座で経済を活性化させ、兵農分離では専門の戦闘集団を作り上げた。これは当時誰も思いつかなかった斬新な発想であった。その後、天正4年(1576)、信長公は岐阜城を長男信忠公に譲り、自らは安土城に移った。そして天正10年(1582)、本能寺の変で明智光秀公に討たれ、その波乱の生涯を閉じたのであった。

その信長公の義父が斎藤道三公である。信長公より以前の稲葉山城(現・岐阜城)の城主であり、戦国の風雲児と呼ばれた。天文18年(1549)、娘の濃姫を信長公に嫁がせ、その後の聖徳寺で会見した際、うつけ者(愚か者)と評されていた信長公が、多数の鉄砲を護衛に装備させ正装で訪れたことに驚嘆した。天文23年(1554)、道三公は家督を息子の義龍に譲るがその後不和になり、弘治2年(1556)、長良川の戦いで義龍に討たれた。討たれる直前、道三公は信長公に対して美濃国(現在の岐阜県南部)を譲り渡すという遺言書を渡した。そして、信長公は遺言に従い美濃国を手中に収めた。

信長公を討ち取った人物として有名な明智光秀公は、享禄元年(1528・諸説あり)に美濃国で生まれたと言われる。斎藤道三公に見出され家臣となったが、弘治2年(1556)、長良川の戦いで道三公側に付いたため、義龍に明智城を攻め落とされ越前へ逃れた。その後、信長公が天下取りを進める際に、將軍足利義昭との間を取り持つなど多くの功績が認められ、信長公の重臣となった。しかし、天正10年(1582)、前述の本能寺の変を起し、主君である信長公に反旗を翻したが、羽柴秀吉との山崎の戦いで敗れた。これは光秀公が信長公を討ってからわずか13日のことと言われ、三日天下と言われている。